

第2回経済学史学会賞受賞作講評

佐々木憲介『イギリス歴史学派と経済学方法論争』

北海道大学出版会，2013年

第2回経済学史学会賞の対象は、19世紀を中心とする論題で、2018年1月1日から起算して、5年前から3年間（つまり2013年1月1日から2015年12月31日まで）に公刊された会員の単著である。11の単著を選考の際に考慮し、最終審査の対象となる2つの単著を選定した。そのうちの1つを第2回経済学史学会賞として全会一致で決定した。

イギリス歴史学派の豊穡な言説を引証することで、方法論争の歴史的・現代的意義を明らかにしようとした秀作である。本書の最大の特長は、各章に配置された明確な論点によって19世紀後半のイギリス方法論争を再構成した上で総括したことである。さらに各論点は、20世紀につながる論争を用意して、『経済・経済学』を思慮する現代の我々にも訴えかける広がりを持っている。この論点は、次のように各章で綿密に説明されている。

例えば、経済人の概念は有効か（第2章）、経済現象を社会から孤立化できるか（第3章）、所与の事実と理想化された状況のどちらが優位か（第4章）、歴史に（発展）法則はあるのか（第5章）、事実の説明として一般法則と多様な解釈のどちらが優位か（第6章）、学説は普遍的か（第7章）、方法論と政策論をどのように結びつけるか（第8章）、などである。なお、論争の前史・開始・深化・終結という形で、全体の概観も与えられている（第1章）。

ここでは特に、第2章の『経済人』をめぐる論争を取り上げておこう。シーニアによる経済人の定式化（合理的な富の追求）に対して、歴史学派の先駆者ジョーンズは、多数の人々の振る舞いを見極めよと応じた。J.S.ミルは科学的方法に必要な手続きとして、経済人の概念を擁護した。以上の前史に続き、歴史学派レズリーは、経済活動の歴史的な変化を重視し、「富の欲望」動機の抽象性を批判した。理論家マーシャルは非利他的行動の存在を認めるが、貨幣で測定できる動機に着目して、経済人も多様な動機を保有できるとした。さらに人間や組織の進歩には、貨幣では測定しにくい動機も必要とされた。マーシャルは人間の経済行為が制度・習慣を変えられる可能性も論じた。ただし、個人と制度の相互作用を認めるとしても、どのような関係かについては、未解決のままである。

以上の考察を代表例として、論争の前史、当事者による双方向的な議論、論争の帰結（未解決

問題の指摘)などが手際よく、しかし説得的に論じられている。

各章に配置された論点の総括を通じて、本書は「帰納法対演繹法」、「歴史対理論」、「保護貿易対自由貿易」などの単純化された理解に疑問を呈し、イギリス歴史学派が持っていた豊富な内容と影響を読者に投げかけている。著者は上記のような現代にも通底する論点に対して、意図的か無意識的か、ドイツにおける方法論争や、現代の科学哲学の方法といった外在的な援用を避け、徹底的に当時の文脈・言説に拘っている。ここに、欧米の経済学史家が得意とする《問題史的接近》と日本の経済学史家が自負する《テキストの徹底的な解釈》とが結合していると見ることができる。

欲を言えば、《はじめに》の拡充と、全体の総括たる《終章》の存在があれば、さらに本書の意義が読者に伝わりやすかったであろう。前者では、方法論争を論じる際の「視座」や「方法論」の提供である。著者は一連の共同研究で最先端の経済学方法論も熟知しているはずである（もっとも、メタ視点を先に論じるよりも、原典に密着する方法こそ、近年の《自然主義的転回》を応用したとも言える）。後者では、イギリス歴史学派が持つ経済学史上の意義を、総体として結論付けて欲しかった。さらに、現代的・国際的な意義を持つテーマでもあるので、続編（20世紀の方法論）や外国語による発信も期待したい。

これらの課題はあるものの、先行研究への配慮、構成・論理展開・用語の明瞭性、経済史や哲学など周辺領域への波及など、経済学史学会賞として十分にふさわしい作品であると結論する。なお、本誌を含め、本書には4つの書評があり、次のように高く評価されている。「方法論を扱っていながら、ある意味で「経済学方法論」を批判的に見ているというひねり技が効いている」（廣瀬 2013: 51）。「イギリス歴史学派の問題提起を再評価し、その提起したものが今日においても意味のある論点を含むことを示すことに成功している」（河合 2014: 58）。「その精力的な取り組みと展開された内容は高く評価されるべき」（上宮 2014: 144-45）。「多様な歴史学派、そして複雑な方法論争をテーマ別に整理するという難作業をおこなった」（上宮 2015: 62）。

《書評》

上宮智之：『イギリス哲学研究』38: 61-62, 2015年3月。

上宮正一郎：『経済学史研究』56(1): 144-45, 2014年7月。

河合康夫：『歴史と経済』223: 57-59, 2014年4月。

廣瀬弘毅：『福井県立大学経済経営研究』29: 45-53, 2013年10月。

2018年6月1日

経済学史学会

経済学史学会賞選考委員会